

救護棟カルテ No. 9



台風の後には風によって流されてしまった海鳥が内陸で保護されることがあります。今年の台風 19 号の後には中通り地方から海鳥の搬入が 2 件ありました。

△ササビの赤ちゃんが無事に野生復帰しました！

令和元年5月に野生生物共生センターへ2匹のムササビの赤ちゃんが運ばれてきました。

運ばれてきたのは体重が約 300g の、生まれてから推定 40 日齢の姉妹でした。

2 匹の親は民家の納屋で子育てをしていたため犬に襲われてしまいました。その数日後に納屋の中に残されていたムササビの赤ちゃんを見つけた住民の方から、助けてあげたいと野生生物共生センターへ連絡があったのです。

保護当時、まだ離乳していなかった2匹はミルクをスタッフにもらいながら育ちました。ミルクを嫌がってなかなか飲まなかったり、体調を崩してしまったりすることもありましたが、8 月には約 800g まで大きくなりカエテや桜の葉や実、ブドウやリンゴなどの果物も自分で食べることができるようになりました。

離乳ができれば今度は広い場所で飛び訓練です。訓練場に丸太を並べて木に見立てます。最初は歩いて渡れるように細い枝も付けました。初めのうちは枝の上を走り回っていたムササビ達でしたが、次第にジャンプして丸太から丸太へ飛び移る様になりました。ジャンプする様になったら、枝を減らしたり、丸太と丸太の間隔を広げたりしてジャンプする距離を長くしていきます。そうして 9 月には上手に両手両足を広げて訓練場の中を滑空する様になりました。9 月のさわやかな風が吹く秋晴れの日に、2 匹は故郷のいわき市に帰っていきました。今度は、また納屋に入り込んだりしてしまわないように、人里から離れた静かな森の中です。



写真1 ミルクを飲むムササビ。小さい手でしっかりシリンジをつかんで飲んでいます。

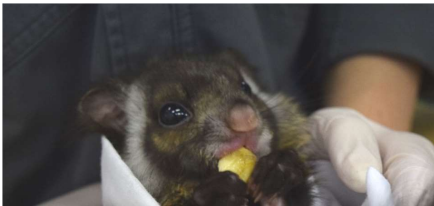


写真2 バナナを食べる様子。離乳し始めの頃です。保護当時より少し大きくなりました。



写真3 訓練場の様子。上手に滑空しています。



写真4 放獣の様子。故郷の森へ帰っていきました。

今年はムササビの搬入や問い合わせが例年に比べて多くありました。今回の2匹のムササビの救護者宅でも、以前はムササビが住んでいる大きな木が家の近くにありましたが今はその木がなくなってしまったそうです。彼らの住処となってきた福島県豊かな自然環境が、変わりつつあるのかもかもしれません。

あだたら 森の回覧板



ゴイサギ

Vol. 9 秋号



【あだぼんフレンズの名前が決まったよ！】

平成31年4月27日から令和元年5月6日までの期間中、野生生物共生センターのキャラクター「あだぼん」の友達である「あだぼんフレンズ」の名前を募集しました。ご投票くださいました皆様、ありがとうございました。集計した結果、以下のとおり決定しましたので、この場をお借りして発表させていただきます。今後、様々な場面で登場する予定ですので、あだぼんフレンズたちをどうぞよろしくお願ひします。



野生生物共生センターでは、野生動物の剥製やパネルの展示、映像放映等をおこなっており、入館料無料で自由に見学・閲覧できます。事前にご相談いただければ、団体でのご利用や職員による解説などの対応も可能ですので、興味をお持ちの方はお問い合わせください。

詳しくは... [HP](#) [環境創造センター](#) [検索](#)

発行: 福島県野生生物共生センター
〒969-1302
福島県安達郡大玉村玉井字長久保 67
電話 0243-24-6631
(9:00~17:00 月曜休館日)

環境学習会

野生生物共生センターでは、今年度、生物多様性の保全について学ぶことができる環境学習会を計3回実施しました。どの回も人気があり、応募しても参加できなかった方が多数いました。そこで、第1回～第3回の内容を一部ご紹介いたします。

第1回 「夏の野鳥や自然の観察を通して、ふくしまの環境について考えよう！」



7月28日(日)に日本野鳥の会 郡山支部より3名の先生方をお招きし、フォレストパークにあるセラピーコースの中を散策しながら野鳥や植物についてのお話をいただきました。

散策の中では、ホオジロやノスリなど多数の野鳥を観察することができ、その他、オオルリボシヤンマ、モリアオガエルの卵、リスの食痕なども観察することができました。

また、散策の節々では、野鳥のオス、メスの体色の違いに関する話や食物連鎖に関する話などをしていただき、参加者は真剣に耳を傾けていました。

第2回 「“特定外来生物”ウチダザリガニを釣って、食べて、学ぼう！」



8月12日(月・祝)にNPO法人裏磐梯エコツーリズム協会の五十嵐悟先生をお招きして、裏磐梯レイクウッドで特定外来生物についての学習会を実施しました。

五十嵐先生から特定外来生物とは何か、ウチダザリガニはなぜ特定外来生物に指定されているのか、また、その生態はどんなものか等についてお話をいただき、約1時間、参加者全員でウチダザリガニ釣りをして実際に観察を行いました。その後、釣ったウチダザリガニは、ポイルして参加者の方々に試食してもらいました。多くの参加者がウチダザリガニを釣ることができ、楽しみながら学習していました。

第3回 「大きな地震により生き物はどんな影響を受けたのか？」



9月29日(日)に国立環境研究所 福島支部の玉置雅紀先生をお招きして、東日本大震災により生き物たちがどんな影響を受けたのかお話をいただきました。

前半には、津波による影響や帰還困難区域等で人がいなくなった影響について干潟の生き物やイノシシの事例をもとにお話をいただきました。

後半には、センサーカメラによる動物の撮影や発信器を使った動物の追跡調査などで実際に使用している調査機材を使って、参加者の方々に野外調査の疑似体験をしてもらいました。

業務紹介コーナー ～動物由来感染症の調査～

「動物由来感染症」をご存じでしょうか。「人獣共通感染症(ズーノーシス)」や「人と動物の共通感染症」などともいわれますが、動物が保有する病原体が人に感染し健康被害を起こす感染症を動物由来感染症と言います。狂犬病、日本脳炎やエキノコックス症などが有名ですが、最近では鳥インフルエンザやマダニに咬まれて感染する重症熱性血小板減少症候群(SFTS)などの感染症も話題になっています。

今回は、野生生物共生センターで行っている動物由来感染症の調査のうち、マダニを介して動物から人に感染するダニ媒介性感染症の調査を紹介します。

【調査1 マダニの生息状況調査】

福島県内で保護された野生動物の体表に付着しているマダニの種類を調査しました。

表1 動物の種と採取されたマダニ

分類	種名	調査頭数	チマダニ属			マダニ属		カクマダニ属	キラマダニ属
			キチマダニ	フタトゲチマダニ	オオトゲチマダニ	ヤマトマダニ	タヌキマダニ	ヒトツゲマダニ	タイワンカクマダニ
中野区哺乳類	タヌキ	8	○	○	○	○	○		
	アナグマ	1	○	○					
	キツネ	1	○		○			○	
大野区哺乳類	イノシシ	4	○		○				
	カモシカ	1	○						
	ツキノワグマ	2			○				○
鳥類	オオタカ	1			○				
	フクロウ	1	○						



今回の調査で、これまで福島県内では生息が確認されていなかったタカサゴキララマダニというマダニが初めて確認されました。タカサゴキララマダニは人嗜好性が強く、人へ病原性を有する紅斑熱群リケッチアを保有することが知られていますが、これまで福島県での発生はありません。そこで、【調査2】の調査を実施しました。

【調査2 ダニ媒介性感染症の抗体保有状況調査】

福島県内で捕獲したイノシシ(44頭)及びツキノワグマ(36頭)から採取した血清を用いて、つつが虫病、紅斑熱群リケッチア症、SFTS、野兎病の抗体検査を実施しました。

表2 ダニ媒介性感染症抗体保有率

	つつが虫病	紅斑熱群リケッチア症	重症熱性血小板減少症候群(SFTS)	野兎病
イノシシ	45.5%	2.3%	0.0%	2.3%
ツキノワグマ	66.7%	8.3%	0.0%	2.8%

(つつがむし病、日本紅斑熱、SFTSは血清抗体価40倍以上を、野兎病は血清抗体価20倍以上を閾値とした)



参考 ダニ媒介性感染症について

	主な症状
つつが虫病	原因はリケッチアによる。5～14日の潜伏期間の後、39℃以上の高熱・ダニの刺し口・発疹が見られる。
紅斑熱群リケッチア症	原因はリケッチアによる。日本では主に日本紅斑熱が見られ、2～8日の潜伏期間の後、39℃以上の高熱・ダニの刺し口・発疹がみられる。
重症熱性血小板減少症候群(SFTS)	SFTSウイルスによる。6～14日の潜伏期間の後、発熱・消化器症状・神経症状等が出現し、致死率は10%を超える。
野兎病	野兎病菌による細菌感染症。3～7日の潜伏期間の後、発熱・頭痛・筋肉痛・リンパ節腫脹などがみられる。



調査の結果、半数近くのイノシシとツキノワグマがつつが虫の抗体を保有していました。つつが虫病は、福島県では毎年患者が発生していますが、イノシシやツキノワグマなどの大型哺乳類へも浸透していることがわかりました。

さらに紅斑熱群リケッチア症についても、イノシシとツキノワグマともに抗体を保有する個体が認められました。紅斑熱群リケッチア症は、これまで福島県内での発生はありませんが、今後はつつが虫病と同様に紅斑熱群リケッチア症についても注意する必要があると考えられます。

今回の調査ではSFTS抗体を保有する個体は認められませんでした。野生生物共生センターでは今後も調査を継続し動物由来感染症のリスク分析を進めていきます。